

## 体験記

# 命の重さと使命感

## 〜真備地内豪雨災害を振り返って〜

### 〇はじめに

私は、平成二十二年四月に岡山県巡查を拝命し、その後、平成三十年三月に巡查部長に昇任、岡山南署地域課兼中国管区機動隊第四小隊第三分隊長を命ぜられた。

現在、私は二十七歳で、昨年結婚し、妻は男の子を妊娠している状況である。これから書き記す体験が、私の人生に対し、大きな影響を与えることは間違いないだろう。

### 〇真備地内豪雨災害発生

平成三十年七月六日、この日は週休日で自宅にいたのだが、西日本を中心とする大雨の影響で、災害発生の危険性が高まっているとして、待機命令を受け、機動隊において待機をしていた。

午後十一時三十分頃、「真備地内で河川の堤防が決壊し、人が流されている」といった情報が入り、待機していた管区機動隊員は全員真備地内へと出動することとなった。現場に到着したものの、土地勘がないことに加え、夜間であったことから、状況の把握は困難を極めた。暗闇で何も見えない中で、どんどん冠水が拡大し、足元をほう雨水に恐怖を感じたことを覚えていた。そんな状況ではあったが、各分隊ごとにマイクロ車両に乗車して、避難誘導、交通規制等を、夜を徹して実施していたのである。

### 〇苦渋の決断

六日から真備地内で活動し、あつという間に夜が明け、気付けば午前八時頃だったと思う。このとき私は、分隊員二人と共に、冠水場所から少し離れたコンビニ付近で、冠水被害が大きい道路へと向かう車両を規制し、迂回させる任務に就いていた。このコンビニの駐車場には、自宅付近が冠水したため、車両で避難してきた方々の車両十数台が駐車されており、私自身も「この場所であれば、冠水している場所から距離も離れているから、とりあえずのところは安全だろう」と思っていた。

しかし、事態は一気に急変するのである。私たちがいた場所の周囲それぞれの方向から、続々と人が避難してきたのだ。その人たちは口をそろえて「冠水がひどくなってきたから、水のない方向に避難してきた」と言う。全く情報のない中で任務に当たっていた私は、このときにやっと周囲を水で囲まれていることに気付いた。正にあつという間だった。ほんの数分の間、水位が増していき、私の下半身が浸かってしまったのだ。

これは一刻の猶予もない。早く避難しないと水に飲み込まれてしまう。私は、警察車両に一般人を乗せて避難させようと考えたが、安全な高い場所までは距離にして約二キロメートルほどは離れている。仮に車両で移動しても、途中で冠水により立ち往生してしまう可能性が高いし、一度に搬送できる人数は限られており、何度も往復できる時間的な余裕もない。さらに、

このまま限られた人だけを避難させたとしても、コンビニに駐車している車の人たちはどうなるのか。迷っている時間などなかった。

水位が上がリ、車に取り残された場合、車ごと流されることや、車から脱出できず、車内に水が入り、溺死するおそれもある。私は、車両を捨て、まとまって徒歩で少しでも高い場所へ避難するしかないと決断した。分隊員二人に指示を出し、三人で協力して、コンビニ駐車場に駐車された十数台の車両全てに声を掛け、男女二十数人の集団を作り、安全な場所へと誘導することとしたのである。

#### ○一軒の一般民家の存在

男女二十数人を安全な場所へと誘導する私は、またさらなる決断を迫られることとなった。私がいた場所の付近一帯は、田畑と二階建ての一般民家しかなく、安全な土手や高台まで、かなり距離があったのだ。避難者の中には高齢者も数人おり、水位も腰の高さまで達していたことから、距離のある高台までの避難は不可能であった。

「この先どうすれば良いのか。もう後戻りはできない」

このとき私は、全員が助かるには、近くにあった一般民家の二階に避難するしかないと考えたのだ。しかし、こういった状況で大勢の人を連れていたせいか、何軒も避難を断られた。そ

うしているうちに、水位も胸のあたりまで達した。私は、避難者の方々の不安や恐怖心を和らげるため、「大丈夫です。頑張りましょう」と声を掛けつつ、藁をもすがる思いで、何軒も何軒も避難をお願いしてまわった。

水位もぎりぎりのところでやっと避難を受け入れてもらい、二人の老夫婦の住む二階建ての一般民家へ全員無事避難することができた。まだ助かったわけではなかったが、その老夫婦のはからいが温かく、「本当にありがとうございます」と震える声で何度も繰り返しお礼を言い、自身の目頭が熱くなったことを鮮明に覚えている。

#### ○人生で一番長い約十時間

避難先で確認した結果、警察官三人、避難者（男性十人、女性九人、犬一匹）、家人二人の合計二十四人と一匹といった大勢が、一般民家の二階に避難している状況であった。私は改めて全員に対し、「私は岡山県警の板谷と申します。こういう事態なので、正直救助はなかなか来ることができないと思います。でも頑張って絶対に生きて帰りましょう」と言い、食料や水、毛布等を家人からお借りし、避難者の方々に配布し、部下を含めて余計な体力を使わず、休んでおくことを告げた。私は、避難者それぞれに対し、「頑張りましょう。体調は大丈夫ですか」などと声を掛け、時には冗談を言ったりして、少しずつではあるが、避難者に笑顔が見

えるようになっていた。さらに、次第に少しずつ避難者全員にまとまりが生まれ、「皆で乗り越えよう」といった前向きな雰囲気生まれたのだった。

しかし、安堵する間もなく、さらに困難が私たちを襲う。雨が強くなり、水位が家屋の二階にまで達したのだ。数人で協力し、水が二階の部屋内に入ってこないように、家にあるものを使ってバリケードを作ってみたが、水の勢を抑えることはできなかった。このとき、避難してから既に約十時間近くが経過しており、避難者の疲れはピークに達していた。そこに水が来たことで、避難者の方々が大声や悲鳴を上げた。私に対しても、「救助はまだなんですか。何とかしてください」と詰め寄る人もいた。正に地獄絵図のような光景であった。当然私は数時間前に、この場所にこれだけの人を避難させていることを、直属の小隊長、所轄警察署、消防本部に連絡し、救助要請も行っていた。それでも救助が来ないところを見ると、情報が全くない状況であっても、周囲もひどい状態であることを察することができた。

### ○生きるために

私は、もう救助が来る可能性は薄いことを察し、これ以上、水位が上がることを考えれば、屋根等のさらに高いところへ避難するか、泳いで約二〇〇〜三〇〇メートル離れた高梁川の土手まで避難するか二択しかないと考えた。しかし、避難先の家の構造では、屋根の上へ上

ることは困難な状況であった。泳ぐことについても、私自身が実際に濁流の中を泳いで試してみたが、私一人であれば何とか泳ぐことはできたものの、高齢者や女性を含む二十数人全員を避難させることは不可能であった。最終手段として、私たち警察官が着ていたライフジャケットを高齢者や女性たちに着せ、また、家にあつた衣装ケースの中身を全て空にして、浮き輪の代わりになるよう準備するなどして、全員で生き残るためにできる限りの手段を尽くしたのであった。

今思い出しても、先が見えない極限の状況ではあつたが、「警察官である私が怖いとか不安であるといった気持ちを出すと、避難者や部下はもっと弱気になってしまう。はったりでもいい。絶対に弱みは見せられない」といった強い使命感が恐怖心を凌駕しており、意外と冷静だったのではないかと思う。

その後、災害派遣要請を受けた陸上自衛隊の隊員の方が乗った手漕ぎボートが救助に来てくれたのである。正に、全員が助かったと胸をなで下ろした瞬間であつた。

### ○妻、子ども、両親への思い

今回私は、正直死を覚悟した。「俺、死ぬかもな」と考えて、一番最初に頭に浮かんだのは、昨年結婚した妻と、妻のおなかの中の子どものことだった。電池が切れかけのスマートフ

オンで、妻の写真を見ると、何とも言えない気持ちになった。幸い電話はつながる状態にあったので、妻と連絡を取ることもできたが、結局、連絡することはできなかった。本当にもし死んでしまったら、妻の声を聞くことはできなくなってしまうが、やはり心配を掛けたくないと思いい、連絡することはできなかった。そんな中で唯一、連絡を取ったのは、警察官である父親であった。警察官である父親であれば、今の状況を話しても、取り乱すこともないだろうと思っただけである。父に現状を話し、「多分救助来れんと思うけど、できることを全部して、絶対に生きて帰るから。死んでたまるか」と伝えると、父は言葉少なく「分かった。一番大事なのは命だからな。頑張れよ」と言ってくれたのを覚えている。不安や恐怖も当然あったが、「妻と生まれてくる子どもを残して死ねるか。絶対に生きて帰ってやる」という強い信念が勝っていた。強い信念を貫くことができたからこそ、生きることができたのかもしれない。

#### ○おわりに

今回、西日本に甚大な被害をもたらした災害は「平成三十年七月豪雨」と名付けられ、多くの方が犠牲になり、広島県警では私と同じ年代の警察官も殉職された。私はその後も、被災地における捜索活動や警戒活動等に従事したが、やはり被害は甚大であった。私が避難誘導を行ったコンビニ付近からは、私たちが使っていた警察車両二台と、避難者が使っていた車両が発見されたが、全てが濁流により、車両内部に至るまで破壊されていた。さらに、この付近からは多数の御遺体も発見され、少しでも自分たちの避難誘導が遅れていたらと考えると、胸がぞつとする。

ここまで書き記してきたことが、今回の災害で私が体験した内容である。決して、すごいことをしたとは思っていない。しかし、全く知らないこの日出会った男女二十数人と、警察官三人が「生きる」という共通の目的を持って一致団結し、全員無事生き残ったことは紛れもない事実である。私は警察官を拝命して九年目を迎えるが、警察人生において初めて、本当に人の役に立つことができたと感じている。今後も、今回の経験を生かして、大切な人を守ることで、できる強い警察官でありたい。そして最後に、私は警察官という職業を心から誇りに思う。